

●▲■ 1 煉瓦造の酒蔵の現在

日本酒をつくる酒蔵とは漆喰塗りの土蔵のイメージが強いが、明治中期から大正期にかけては赤煉瓦による煉瓦造の酒蔵が全国各地に建設された。その数の正確な特定は難しいが、現存し現役で使用されるものは6庫が確認される。北海道からみると、根室の碓氷勝三郎商会(1915)、栗山の小林酒造(1900)、弘前の弘前醸造(旧富名醸造1918)、八戸の八戸酒造(1924)、東京王子の醸造試験所(1902)、佐賀伊万里の(松浦一酒造)がある。現役酒造庫ではないが、建物が残るものとしては弘前の福島醸造、前橋市の旧山賀酒造と旧曾田酒造(大竹酒造)の3蔵がある。今は消滅したが、筆者がリアルタイムで目撃した酒蔵としては、西宮の南辰馬家や辰馬本家の双子蔵、神戸魚崎の山邑酒造がある。そのほかに未見におわったが若井酒造、菊正宗の2蔵があり、灘五郷では5蔵が確認できる。文献からは池田で1蔵の写像が見出せた(図9)。すなわち全国ではすくなくとも15蔵が煉瓦造で建設されていた。全国の悉皆調査をおこなったわけではないから、さらに建てられていたかもしれないが、20庫前後はあったものと推察される。

筆者は1994年から、煉瓦造酒蔵をめぐる旅をおこない、全国各地をまわった。煉瓦の酒蔵と思ったら、久留米の福徳長のように、砂糖黍の糖蜜を利用した酒精工場であった。秋田八郎湯の小玉醸造のように清酒酒造場であるものの、煉瓦蔵に関しては味噌醸造所であった。すなわち、一見煉瓦造の酒蔵と思ひしや、清酒の酒造場はきわめて少なく、パーセンテージとしては昭和31(1956)年の最盛期4073場のうち20蔵となる。ということはわずか0.5%程度にすぎず、そのような意味ではきわめて特殊な事例と捉えられる。ただし視覚的には赤煉瓦壁による圧巻の外観を示し、新しい時代がはじまった予感を示すものとなる。しかし煉瓦の時代は長くは続かず、関東大震災の影響で大正期を最後に建設されることはなくなる。明治16(1883)年から大正12(1923)年の40年間にすぎなかった。その後は白い箱の鉄筋コンクリート造に変容し、現在までも続く。

旅の記録を筆者は以下の8本の論考にまとめ、『醸界春秋』誌に発表している。「国税庁酒造試験所」(No35,1994)、「四季醸造の先駆者・福島藤助—弘前に遺された壮大な煉瓦の酒造蔵—」(No90,2004)、「酒の町・瀬高の煉瓦蔵—千代錦・園之蝶・菊美人—」(No97,2005)、「灘の西郷・若井酒造—明治期・本邦第二の酒造場の記憶—」(No137,2010)、「青森・五所川原の煉瓦の酒蔵—太宰治の父が関わった津軽酒造株式会社の遺構—」(No140,2010)、「北海道最古の蔵元・小林酒造—煉瓦造・石造の酒造の一群—」(No143,2011)、「根室の町と酒造家—煉瓦造の酒蔵・碓氷勝三郎商会—」(No198,2021)、「西宮・わが国最初の煉瓦造酒蔵と洋館」(No206,2023)

●▲■ 2 少数派の煉瓦造

ではなぜ煉瓦造の酒蔵の建設が少なかったのか。伝統的な酒蔵は生産に合わせて、漸次規模を拡張してきたために一挙に建設される

ことが少なかったことによるものと考えられる。それと対象的なものは明治前期に一斉に誕生するビール醸造所であり、欧米からのプラントを移入して煉瓦造で建設される。

煉瓦造の酒蔵が少なかった理由を岡村祐次は『最新醸造経営法』(明文堂,1923)のなかで次のように記した。

「現今普通の醸造所は多くは祖先伝来であって、現代の進歩したる工場組織に依りて建設せられたるものは極めて少ない。在来の醸造場は、膨大な一つの建築の中に各異なった目的を有して居る場所が雑然と並んで居るのであるのみならず、創業以来増設に次ぐに増設を以てし、漸次拡張し来りたる醸造場に於ては全く統一がない。」

岡村は続けて、酒蔵は「木造、若しくは土蔵造りで火災の防備に就ては余りに考慮して居ない。酒蔵、醤油蔵が土蔵造りなるは、火災の防備よりは寧ろ他の目的からであろう。(中略)土蔵造りなどよりは、煉瓦又はコンクリート建がよるしい。」と記す。岡村は酒蔵に土蔵が採用された理由を火災対策ではなく、温度と湿度の調整であったことを暗示する。

一方で煉瓦造の酒蔵は植民地の満州や朝鮮では多く建設された。大手の酒造家が計画的に一挙に建設することが多く、またあまりに寒冷地ゆえに土蔵では困難で、煉瓦造が採用されることとなった。このことは北海道に煉瓦造の酒蔵が多いことと共通する。

満州・奉天での事例をみると、「蔵の壁は煉瓦が二重に積まれる。赤煉瓦二枚半積、すなわち二尺の厚みがあり、天井の裏板の上には粗穀を三尺位一面に敷いて居り、其他戸窓は二重ガラスになし居る度、丁度酒蔵の全部が麴室の構造と同様である」(坂本隆之助「本年度満州の酒造状況」『日本醸造協会雑誌』31(3),日本醸造協会,1936)とある。麴室だけが煉瓦造であった酒蔵を筆者はこれまでに日本各地で数多く目撃しているが、極寒の地満州では酒蔵全体が麴室と同じ構造とは興味深い。麴室以上に煉瓦造が顕著なものも釜場にある煙突であった。

●▲■ 3 煉瓦造の煙突

煉瓦造の酒蔵はきわめて少ないが、全国各地にある酒蔵を見渡すと、酒蔵は土蔵だが、煙突だけは煉瓦造のものが多い。すなわち、煉瓦の煙突は各地の酒蔵で普及する。「戦前の酒造蔵に在っては其の酒蔵風景とは切り離せぬ風物とも化した赤煉瓦の煙突の林立する」(藤田義相編『摂州西宮恵美酒銀行略誌』武庫史纂会,1962)と捉えられていた。この煉瓦煙突は四角形が多く、角煙突とよばれ、その壁面に酒銘が記される。煙突の機能以外に自社銘柄の宣伝塔でもあった。

では酒蔵において煉瓦造の煙突はいつ頃に成立したのか。酒蔵に限定した記述はないものの、次のような記述が残っている。「大隈伯、嘗て大阪に至って、実業家の会合に臨みたる時の演説に、明治十年の頃は、大阪に煉瓦煙突、僅かに十六本ありしのみ。今や即ち無数也」(黒頭巾『現代人物競』読売新聞社,1908)とある。ここの大阪の煉瓦煙突は紡績工場のものであり、汽罐室(ボイラー

室)で石炭を燃やして蒸気を発生させた。おそらくはその嚆矢は明治一桁台後半だったとおもわれる。煉瓦煙突は明治10年代から20年代に激増する。並行して煉瓦製造会社が全国各地に次々と設立される。

「大坂の工業一斑」(『工業雑誌』(3(61),工業雑誌社,1894)によれば、明治26(1893)年の調査では工場数は2390箇所あり、煙突数は581基であり、その内訳は煉瓦積297、鉄製164、土樋(土管のとい)120であった。ここでの工場数には酒蔵も含まれており、ここから類推すれば、酒蔵でも急速に煉瓦煙突が普及していったことがわかる。

煙突建設にあたって各府県の警察では「煉化石煙突仕様書」の提出を義務づけていた。『大阪府警務規定』(下巻,大阪府警察部,1892)によると、明治22(1889)年10月9日に府令第58号「営業二供スル為メ煙突ヲ建設セントスル者出願方」が発令され、仕様書と四隣三十間以内の地主の承諾書を警察に提出することとなった。

『日本ぐるり酒蔵探訪』(桜木廂夫・平凡社,1986)のなかの、とある蔵元の言として、酒蔵の「煙突は舶来品で、明治維新の文明開化で日本に上陸した」もので、「それまでは釜場の屋根に煙出しがあっただけ」で、煙突はなかったという。著者の桜木は江戸期の酒蔵の絵を調べたが、煙突のある酒蔵は皆無であったと記す。

酒蔵の煙突は精米の動力に蒸気使用を契機にして生まれたもので、火力に石炭を使った。その出発点は明治16(1883)年に創業の堺精米会社であり、堺の酒造家鳥井駒吉が設立した。

明治24(1891)年の濃尾震災では岐阜県・愛知県の過半の煙突が倒れた。つまりこの時点で煉瓦煙突は相当に普及していた。明治27(1894)年の東京の震災では「損害の最も甚きものは煉瓦煙突及土蔵等なり」(『震災予防煙突建築法』『工業月報』(15),奨工会,1894)とある。これらの被害を受けて、アングルなどの鉄の部材を壁面の縦横に廻す補強方が取られることとなる。

一方で煉瓦建築や煉瓦煙突をマイナス要因としてみる者も現れていた。文明開化に与しない考えであり、その言説をみると、「茅葺の屋根壊られて、赤煉瓦の建築建つ市中に簇立する巨大の煙突は趣味破壊の喊声と毒煙とを盛にあげる」(山方香峰編『衣食住:日常生活』実業之日本社,1907)、とある。

●▲■ 4 煉瓦酒蔵の建築的意味

時代で分けると灘五郷の蔵が全国でもっとも早く、明治35(1902)年の国税庁の醸造試験所より早く、明治10年代から20年代に建設されていた。建設背景にはふたつの事象が関係している。ひとつは明治21(1888)年に発表された「酒蔵改良ノ説」という論考で、「酒蔵ヲ改築シ総煉化石ニテ高ク積ミ上げ、其厚サ一尺以上トナシ」と内容を示すもので、煉瓦造へのすすめであった。もうひとつは明治24(1891)年に竣工した大阪の吹田村麦酒醸造所の誕生であり、煉瓦造の巨大な建物であった。

煉瓦造酒蔵は構造的には二通りあり、組積造の構造材をなしえたものと、耐火を考えた木造の被覆材としての煉瓦造である。前者は醸造試験所や大正期の弘前の福島醸造が該当し、梁には鉄骨が用いられた。後者は灘五郷をはじめ、全国各地の煉瓦造酒蔵のものである。

1) 全体像

現在の灘五郷に煉瓦の酒蔵は存在しないが、1995年の阪神淡路大震災までは、白鹿記念酒造博物館の展示スペースの一部になっていた辰馬喜十郎(南辰馬家)の酒蔵、辰馬本家(白鹿)の現役で使われていた双子蔵、山邑酒造(桜正宗)の現役の貯蔵酒庫であった本蔵1号東蔵、沢の鶴の精米場になっていた若井源左衛門(牡丹正宗)の拾貳番蔵の四箇所に煉瓦造酒蔵が残っていた。くわえて震災時には存在しなかった嘉納治郎右衛門(菊正宗)の南蔵が煉瓦造酒蔵であった。ここからは計5つの煉瓦造による酒蔵が灘五郷に建設されていたことが判明する。

建設順にみると、若井源左衛門の蔵が明治16(1883)年、辰馬喜十郎の蔵が明治25(1892)年、双子蔵が明治27(1894)年、南蔵が明治28(1895)年、本蔵1号東蔵が大正11(1922)年と続く。若井源左衛門の蔵は灘五郷のみならず、わが国で最初の煉瓦造酒蔵であった。大正11(1922)年以降、煉瓦蔵が建設されなくなったのは、関東大震災で煉瓦造建築の過半が倒壊したことにより、酒蔵のような大規模な建造物を煉瓦造で建設することが禁止となることによる。

灘五郷で煉瓦造への指向がいかに強かったのかは、西郷の若井源左衛門と西宮の辰馬一族がそれぞれに建築用煉瓦を製造する「煉化石」製造業をおこなっていたことから判明する。若井家では大阪堺で明治18(1885)年より、辰馬家では明治21(1888)年に吉左衛門・悦蔵・半右衛門が共同で辰馬組煉瓦製造部を西宮に設立し、それぞれ煉瓦石製造業をおこなっていた。

灘五郷では壁一枚で酒蔵どうしが隣接する「長屋型」の土蔵造りの酒蔵が明治中期には出現する。その界壁に耐火構造がうたわれた煉瓦造が採択された。また各酒蔵の煙突が煉瓦造となるのも明治前期の頃からである。

灘五郷の煉瓦蔵に言及した『灘五郷酒造一斑』(1919)には次のような記述がある。

「東より今津村、西宮町、魚崎町、御影町、西郷町の各集団地を有し、此の間延長六里、各町には丹珠彫然たる煉瓦造り、或いは巍々たる黒瓦白壁の大建築、幾十百の煙突沿岸一帯に見る、之れ主として酒造蔵なり」

各郷に煉瓦造酒蔵が建設されていた確認はとれないが、今津以外の各郷には煉瓦造酒蔵が建設されており、この記述は概ね当時の様相を示したものと捉えられる。煉瓦造については丹珠彫然たるという形容詞がつくほどに華麗な印象が生まれていた。

昭和初期にはこの煉瓦造の界壁が鉄筋コンクリート造にかわるケースも現れる。関東大震災で煉瓦造の脆弱さが露呈し、耐震性が備わった鉄筋コンクリート造にかわっていく。

2) 若井源左衛門

若井源左衛門の蔵の建物は二階建てで、煉瓦を外壁面にそのままみせる表し仕上げとなる。その積み方はイギリス積となる。ここで用いられた煉瓦の大きさは現在のものとは異なり、高さが低く、「山陽並形」に近い寸法のものとなる。軒下には煉瓦による歯飾りと三角形を構成する装飾が付き、一階と二階の間には歯飾りによる胴蛇腹が取り付く。屋根は寄棟の棧瓦葺きとなっていた(図1、2)。震災時までは沢の鶴の精米工場となっていたが、倒壊した。残念なこ

とに史料に乏しく、設計者や施工者は不明である。堺に煉瓦製造工場を設ける以前に建設した酒蔵である。

若井源左衛門は明治前期では西宮の辰馬吉左衛門とならび、わが国の首位を競った酒造家であった。最盛期には若井家には酒蔵は22、貸し蔵も含めると全部で33あった。明治31(1898)年には二代源左衛門の時代が始まるが、本業に邁進することなく書画骨董や茶器蒐集の世界に生きたことで零落し、大正10(1921)年には酒造は一旦休止となる。その後三代源左衛門の時代の昭和9(1934)年に酒造を廃業する。

大正4(1915)年までに撮られた写真(図3)「岩屋ノ海濱ヨリ大石ヲ望ム」(『阪神沿道名所及実業家写真案内 御大典記念』御影写真研究会,1915)からは海岸に煙突のある煉瓦の3階建ての建物が見て取れる。その右側、すなわち東側には酒蔵が建ち並ぶ様子がうかがえる。大正後期から昭和戦前期に埋め立てられる以前の大石の浜が写っためずらしい写真で、若井源左衛門の蔵があった界隈の雰囲気伝わってくる。

3) 辰馬喜十郎

この蔵は煉瓦造2階建てで、前蔵と大蔵からなる並び蔵であった。共に明治25(1892)年の墨書きが大蔵は大梁に、前蔵は棟木で確認されている。煉瓦壁は外廻りのみであり、内部は木の柱が立てられ、木の梁がかかわされる構造であった。



図1 若井酒造煉瓦蔵外観・若井喜一所蔵
明治期に白鹿に次ぐ全国2位の出荷石数だった



図2 若井酒造煉瓦蔵細部・若井喜一所蔵

辰馬喜十郎は酒造界きっての先進的な人物で、英国製の蒸気機関による精米所の設置(1888)をはじめ、燃料の石炭使用などを先駆けて担った。もっともよく知られた煉瓦造酒蔵はその集大成であったとみることができる。

4) 辰馬吉左衛門

震災まで残っていた新田蔵のなかの双子蔵(9番蔵と10番蔵)は2階建ての建物で、煉瓦造の壁の上に漆喰を塗り、外観上は煉瓦造とは想像できないファサードを示した(図4)。屋根は切妻屋根となり、二つの蔵が接する狭間が共有の釜場となり、そこに煉瓦の煙突を立てる。内部の壁は煉瓦のあらかし仕上げとなり、小屋組も露出する。

新田蔵(図5)は辰馬吉左衛門が本蔵とは別に、西方向の田畑を購入し建設したものである。明治12(1879)年に1番蔵が稼働し、明治27(1894)年完成の10番蔵までの10蔵を15年間かけて完成させ、一挙に生産量をあげる。辰馬吉左衛門は辰馬一族(悦蔵・半右衛門)の共同経営で、明治21(1888)年に辰馬組煉瓦製造部を西宮に設立し、自社生産の煉瓦を使って建設していた。

こういった積極経営がなしえた一因にすぐれた番頭の辰栄之介がいたことが関係する。辰栄之介は先進的な技術の導入を担り、酒蔵の煉瓦造化にくわえ、精米に石炭を燃やして蒸気をつくり、動力源とした。その結果、「東・中・西の三郷を美術的清酒を造る所と



図3 岩屋ノ海濱ヨリ大石ヲ望ム・『阪神沿道名所及実業家写真案内 御大典記念』,御影写真研究会,1915



図4 白鹿・双子蔵・辰馬本家所蔵

せば西宮は実に工業的清酒の醸造地といふべし」(神戸税務監督局編纂『灘酒沿革誌』1907)という様態が生まれていた。

5) 嘉納治郎右衛門

写真は見出せていないが、『本嘉納商店々史』(1959)に収載の「南蔵断面図」(図6)からは従来の土蔵造りの酒蔵の外側に煉瓦の壁を立ち上げ、その間の五寸(約15cm)に木粉を充填し、断熱性能を高める試みがなされていた。建物の四周を廻ったこの煉瓦は二枚積であり、その厚みは二枚でおおよそ45cmとなる。煉瓦造としたのはその直前に起きた御影火災であって、酒蔵が五蔵焼失していた。すなわち、煉瓦壁は防火を目的としたものであった。土蔵の酒蔵の柱と煉瓦壁の間には鉄棒が所々に設けてあり、倒壊を防ぐように工夫されていた。

6) 山邑太左衛門

灘五郷では最後に煉瓦造酒蔵を建設した山邑酒造の本蔵1号東蔵をみる(図7、8)。2階建ての貯蔵酒庫として建設されたこの酒蔵は大正11(1922)年9月8日上棟し、同年中に完成した。仕込蔵としても用いることができる酒蔵であった。大蔵と前蔵からの2棟からなる並び蔵の形式を示し、桁行18間、梁間12間となる。屋根は切妻で本瓦葺きとなり、小屋組は与次郎組という伝統的な和小屋が用いられる。煉瓦壁はイギリス積みとなる。この煉瓦は陸軍

からの払い下げを受けたもので、上質なものであったとされる。

棟札には建設に関わった設計者や棟梁らの名前がしるされる。設計は井田斯民とあるが、どういった人物であったのかは不明である。また山邑酒造のなかに建築係が設けられ、施主側からこの普請を監督していた。担当者名として福井賢定と花田邦治の2名の名が挙げられる。棟梁は大工・高橋作蔵、左官・塗井惣太郎、煉瓦工・阪本増裁、石工・時枝新右衛門の名前が記載はされる。

(Text. T. Kawashima)



図7 山邑酒造・本蔵1号東蔵・北面
『酒のふるさと・灘の酒蔵』, 神戸市, 1981



図5 白鹿新田蔵・長屋型酒蔵・界壁が煉瓦造・辰馬本家所蔵

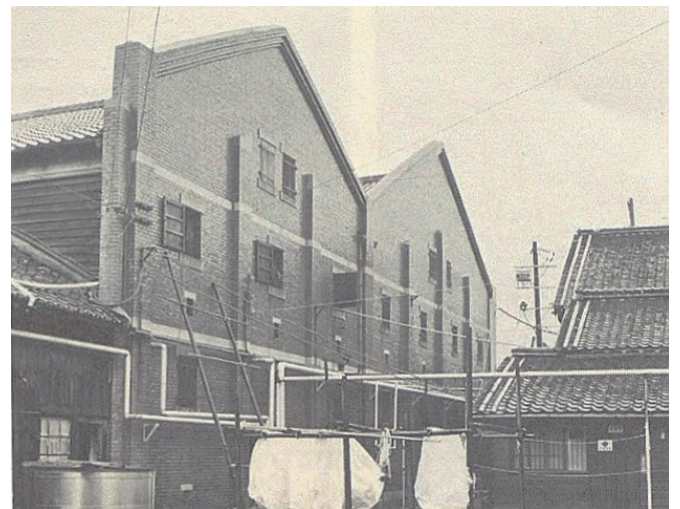


図8 山邑酒造・本蔵1号東蔵・東妻側
『酒のふるさと・灘の酒蔵』, 神戸市, 1981

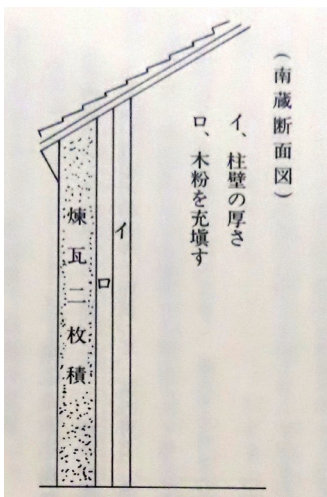


図6 菊正宗・南蔵(明治28年)
『本嘉納商店々史』1959



図9 池田市の元酒蔵・『北摂池田 町並調査報告書』, 池田市教育委員会, 1979

川島 智生 (かわしま ともお)

建築史家、一級建築士、前・京都華頂大学教授
神戸情報大学院大学・客員教授
大手前大学・客員研究員

プロフィールは前号をご覧ください

QA? 本稿に関するご質問・ご意見等は、きた産業 info@kitasangyo.com にご連絡ください。筆者に転送いたします。